

子どもの競技に対する意欲とライバルの存在

1220466 酒井香菜子

指導教員 中川善典

研究背景

少年剣道の指導を行っている中で、普段子どもたちが何を思いながら剣道と向き合い、取り組んでいるのかが気になった。そして、少年剣道において、同じチームのメンバーがどのようにお互いに良きライバルとなり、剣道を継続する動機を高めるのかを明らかにしたいと思った。

研究目的

太田(2004年)の観尺度の質問項目を見ると、ライバルの認知に関して両方が両思いでお互いに思いが通じ合っている場合や、両思いだけどそのことをお互いが知らない場合、そもそも片思いである場合などたくさんケースがある。ひとことで「ライバル」と言っても相手がある話で様々なバリエーションがるはず。そのような点から、以下のクエスチョンに答えを与えることを研究の目的とした。

Q1 太田(2004年)では、ライバルの認知関係が両思いの状況では想定されていなかったが、片思いのケースも存在するのか

Q2 一方向に思いを寄せる関係、双方向に思いを寄せる関係や、思いがばれている状況、ばれていない状況、実際にはどのようなケースがあるのか

調査・分析方法

小学生の同学年の3名を対象に、インタビューを座談会形式にして、自分以外の2人をライバルとして捉えて認知しているのかを調査する。そして太田(2004)の研究の中にある、ライバル観尺度の作成を参考に以下の6つのクエスチョンを設定した。クエスチョン内容について、自由に回答を求める形式をとった。なお調査の過程をICレコーダーに収録し、テープ起こしをしたうえ分析する方法をとった。

分析結果

Q1については、ライバルの認知関係について3組中3組が両思いであり、同じ思いを持っていることが明らかになった。

Q2については、双方向的なライバルの認知関係が成り立っている場合と成り立っていない場合があることが明らかになった。

考察・結論

子どものライバルの認知について、子どもから本音を聞き出すことができた。子どもはライバル認知について思っても口にしないケースが多く、その思いを伝える機会もない場合が多い。指導者の立場からすると、定期的にミーティングを開いたり、1対1で子どもと話をする機会を作ることによって、子どもたちの本音を聞き出すことが出来る。そうすることで子どものモチベーションも向上し、十分な力が発揮できることに繋がる。